# 「リビングラボ」に思う

東北大学名誉教授
**原山 優子**
Harayama Yuko

10年前の生活の流儀、仕事の進め方、人へのアプローチの仕方を思い起こし、今日との間に起こった変化を考えると、主体的に行動変容を起こした部分もあるが、多くのものは無意識のうちに取り入れ、新たな日常となっていることに気がつく。これは個人レベルに留まることなく、社会レベルでも同じ様な現象が起こっている。

この背景にはドライバーとして働く科学技術の躍進、中でも情報を糧とする新興技術の台頭と既存の技術分野との融合が存在し、進化のスピードは更に加速する。

しかし、これらの技術の受け皿となる社会は、元はと言えば、年月をかけて醸成してきた仕組み、制度、価値観に支えられる人の集合体であり、新たな技術・サービスが台頭した際に、それを試し、選択し、時として適応させ、内生化させるまでには相当な時間を要する。うすうす感じている技術の進化と社会変革のスピードのギャップは確実に今後拡大していく。

その一例が人工知能システム（AIシステム）であり、その社会を変革させるポテンシャルは図り知れない。もちろん新たな技術をどう使うか、使わないというオプションも含め、それは人が決めること、と言い切ってしまうこともできる。しかし、現時点で想定し得る社会、更には人類へのインパクトを鑑みると、社会として何らかの判断をすることが望まれる。そこで、誰がどのような枠組で、何を根拠に結論を導き出すのか、となり、国単位、あるいは国際的な枠組みの中でAIシステムのガバナンスが模索されているが、未だ明確な解は無い。

政策手法としては、数年前に、領域を限定した上で既存の制度的制約を試行的に解除し、社会実験を行う「サンドボックス」が登場したが、今後の制度の在り方を対象とする場合、その効力はかなり限定的と言わざるを得ない。

そこで注目したいのが、本巻が特集として取り上げる「リビングラボ」である。概念整理は特集に組まれた論文に委ねるが、そのエッセンスは、空間的に限定された場において、一般の生活者が新たな技術・サービスを実際に体験する機会を作り、共創を原動力として、より良い社会変革の方向性を探る点にある。

世界に目を向けると、「リビングラボ」の試みが数多く蓄積されその体験の共有も進んできてはいるが、手法そのものは未だ開発途上にある。本特集が「リビングラボ」の新たな視点の発掘につながることを祈念する次第である。